

# 「分かち合い」を楽しむ場としてのゲストハウス

——韓国・釜山のゲストハウス・オーナーへのインタビュー調査から——

## The Guesthouse as a Place to Enjoy Sharing:

According to Interview Surveys with Guest House Owners in Busan, South Korea

田保 顕

TAHO Akira

2015年以降、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大後も、ソウルと釜山を中心にゲストハウスは増加傾向を示している。一方、コロナ感染拡大以前からほぼ同様の勢いで廃業者数も増加している。訪韓外国人の需要だけでゲストハウスの開業・廃業の増大を説明するのは難しい。ゲストハウスを開業し、運営を継続するにあたって、オーナーたちの経験や価値意識、それらが醸成される文脈としての社会的背景が強く作用しているのではないかと。そこで、釜山でゲストハウスを営むオーナー4名に行なったインタビュー調査のデータからゲストハウス開業のきっかけや動機を明らかにし、その社会的背景を考察した。その結果、およそ次のようなことがわかった。第一に、経済的理由、すなわち訪韓外国人の増加や宿泊施設の多様化に対する需要の増大は新規開業者を一時的に増加させるものの、運営の継続にはつながらないということ、第二に、ゲストハウスは「素人」によって運営されるという特徴があり、オーナーの個性が反映されやすいということ、第三に、競争社会という側面の際立つ韓国社会において、ゲストハウスは人びとの出世主義的なライフスタイルを改変していく拠点となる可能性を持つということ、最後に、ゲストハウスはオーナーをも含めて人びとが「分かち合いから来る楽しさ」を経験できる場であるということ、である。

キーワード：韓国社会、ライフスタイル、分かち合い

Key Words: guesthouse, Korean society, lifestyle, sharing

## 1 問題設定

2012年1月、韓国における「観光振興法」の改正とそれに伴う「外国人観光都市市民泊業」登録制度の施行により、ゲストハウスに注目が集まった。ゲストハウスとは、主に20～30歳代の外国人観光客が安価で長期に滞在するために利用する宿泊施設である。法的定義によると、外国人観光都市市民泊業とは「都市地域…の住民が居住している…住宅を利用して外国人観光客に韓国の家庭文化を体験できるよう宿食等を提供する業」<sup>1)</sup>を指す。比較的小規模な宿泊施設が想定されており、文化体験の提供を目的とするところから、そのイメージにゲストハウスが合致したのである。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大後も、ソウルと釜山を中心に外国人観光都市市民泊業所数は増加している。本稿で取り上げる釜山に関するデータを見てみると(図1)、2015年あたりから急激に増加していることがわかる。「運営数」は各年の12月時点で営業中の事業所数であり、

「廃業数」は一度登録したものの営業をやめてしまった事業所数である。したがって、新規登録・廃業者数ではないことに注意が必要である。宿泊者として外国人のみが対象となっているため、コロナ禍による打撃を受けるであろうと懸念されたが、実際には2021年12月時点での釜山広域市に登録している外国人観光都市市民泊業所数はこれまでで最大の133軒である<sup>2)</sup>。

図1を見て興味深いのは、登録数が右肩上がりに増加していきの追いかけるように、廃業数も年々増加していることである。コロナ禍が原因であるようにも考えられるが、それ以前の2016年あたりから廃業数は増加傾向であり、そもそも入れ替わりの激しい業態であることがわかる。それでも増加傾向であることには変わりなく、外国人向けの宿を開業しようとする人が跡を絶たない状態である。これらの人びとの、ゲストハウス開業の動機はどのようなものなのであろうか。

石川美澄(2014)は2012年に353軒(うち102票回収)のゲストハウスへの質問紙調査を行ない、開業動機に関する

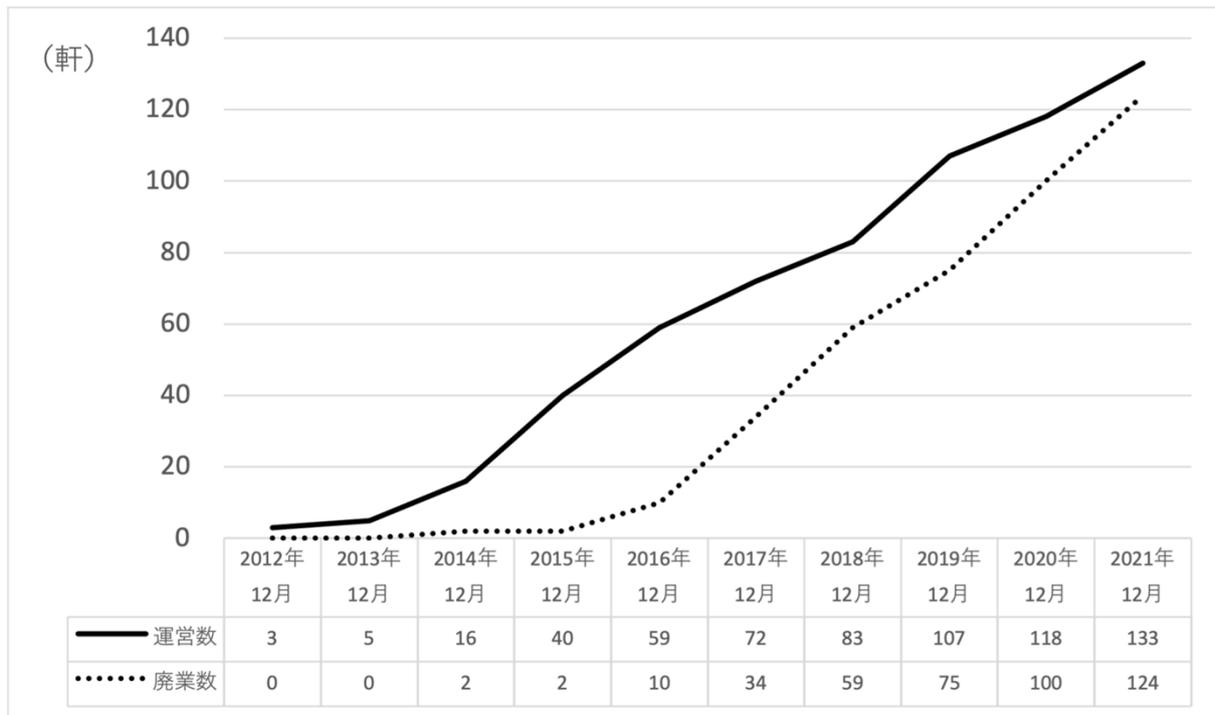


図1 韓国釜山広域市において外国人都市民泊業に登録済の宿泊施設数

出典：韓国観光公社ウェブサイト「Safe Stay」の「地域別一期間統計」  
(<https://safestay.visitkorea.or.kr/usr/stat/areaPeriodSelectList.kto>) より著者が作成。

る自由記述内容をもとに、日本におけるゲストハウス台頭の社会的背景を考察している。石川（2014: 101）は開業動機を社会的理由と個人的理由に大別し、社会的理由として「市場・需要」を、個人的理由として「経済・生活」、「観光経験」、「場づくり」、「まち・文化に対する愛着」、「その他」に分類している。石川は中でもゲストハウスの開業動機として社会的理由に着目し、「外国人用のゲストハウスがなかったため」、「海外からの旅行者に宿を安価で提供するため」など、訪日外国人観光客の増加と宿泊施設のニーズの増大が背景にあること、また、「日本には低料金の宿、相部屋を中心とした宿があまりなかったから」、「この地域には一人旅の人が気軽に使える宿が少なかったから」といった意見から、日本における宿泊施設形態の選択肢の少なさを指摘している（石川 2014: 102）。

韓国の事情も日本のそれと軌を一にしていると見ていいだろう。しかし、釜山のゲストハウスの増加傾向には「市場・需要」という点からだけでは説明できないことがあるように思われる。それが廃業の多さである。図1では示していない休業中の登録事業者5軒をあわせると、2021年12月時点で一度は外国人観光都市民泊業に登録した事業者は262軒であり、その約半数が5年前後で廃業していることになる。ゲストハウスを開業し、運営を継続するにあたって、オーナーたちの経験や価値意識、それらが醸成される文脈としての社会的背景が強く作用しているのではないか。

本稿では、釜山でゲストハウスを営むオーナーたちに行なったインタビュー調査のデータからゲストハウス開業のきっかけや動機を明らかにし、その社会的背景を考察する。

## 2 方法と対象

ゲストハウスについて調べるために旅行者が用いることの多い宿泊施設検索サイト「Booking.com」と「Expedia」を用い、2016年6月27日現在、釜山に存在するゲストハウスをリストアップし、まずはその分布地図を作成した。その際、宿泊施設の名称や施設に関する説明に「ゲストハウス」が使われていることを選択基準とした。釜山において、ゲストハウスは観光地や商業地域に限らず広く分布している。そこで、分布図を用いて7つのエリアに分け、偏りが出ないように調査対象を選定した。

調査実施期間は2016年8月9日～24日と2017年3月17日～28日である。前者の期間に6軒、後者の期間に6軒の計12軒のゲストハウスにおいて、オーナー、その配偶者、従業員13名にインタビューを行ない、また同時に、ゲストハウス内でのゲストたちの参与観察を行なった。現地において、調査者が調査の目的で訪れたこと、ゲストハウスの文化やそこでの人びとの交流に関心があること、得られたデータは学術目的以外に使用しないことを調査協力者たちに伝え、了承を得ている。本稿では、そのときに行なったインタビュー内容と観察結果を記述した

フィールドノーツをデータとして用いる。

インタビューは主に韓国語で行なわれ、まれに英語を用いることもあった。しかし、本稿では調査協力者たちの語りをすべて日本語で表記している。キーワードになると思われる語や、インタビュー中の調査協力者たちや著者の身振りなどについては、適宜 [ ] を用いて示している。

本稿では、調査対象者13名のうち、4名の語りを取り上げる。この4名を選んだのは、ゲストハウス開業のきっかけや動機、また社会認識や価値意識が比較的明確であったからである。匿名性を担保するため、ゲストハウスの位置は明らかにせず、ゲストハウスやそのオーナーの名前はすべて仮名を用いている。

以下の章では、4名のゲストハウス・オーナーがどのような前歴を経て、どのようなきっかけや動機からゲストハウスを開業するようになったのか、また、どのような社会認識や価値意識を持ち合わせているのかについて、オーナーたちの語りをもとに示していく。

### 3 ゲストハウス開業のきっかけ・動機と社会認識

#### 3.1 ボシ・ゲストハウス

ボシ・ゲストハウスは最寄りのバス停から斜面に敷設された階段を降りたところ、丘の中腹の住宅街にある。もともと釜山は山がちな土地であり平地が少なく、山の斜面に数多くの民家や集合住宅が立ち並んでいるのを見るのは珍しくない。とはいえ、宿泊施設としてはお世辞にもアクセスの容易なゲストハウスと言うことはできない。オーナーのミンジさん(36歳 [2016年当時], 女性)は、「韓国に来る旅行者にも家にいるような感じで泊まれる場所を提供したかった」(2016年8月11日フィールドノーツより)と、ここをゲストハウス開業の地に選んだ理由を述べている。

「ゲストハウスをやる」というと、みんなつつい近代的なものを作ってしまうですが、「外国人が好むゲストハウスって何だろう?」と考えると、家にいるみたいな感じ、韓屋 [한옥] がいいのでは、と、ここを見つめました。家賃 [월세] も安いです。でも、住宅地で、しかも階段の途中で、「こんなところに客が来るのか?」とみんな思っていたみたいだけど、多くの人に来てくれて、近所の人も「あれ? ウチも金儲けできるんじゃないか?」ってなって。(2016年8月11日フィールドノーツより)

ボシ・ゲストハウスは裏口から出入りするようになっていた。裏口を入ると小さな庭があり、平屋建ての韓屋が建っている。玄関で靴を脱いで入るとすぐにあるのが台所で、その奥に4人用ドミトリー部屋が2つある。

ミンジさんは釜山の出身であり、高校卒業まで釜山で暮らしていた。高校卒業を期に、19歳でソウルの大学に進学する。大学卒業後そのままソウルに留まり、様々な放送局や出版社でジャーナリストとして活動する。現在もジャーナリストとしての活動を継続しており、同時に、活動家として動物愛護活動を行なっている。

動物愛護活動をしているのは、言葉によって人に自分の意思を伝えることができない動物たちを人間が殺してしまうことに対して疑問を感じていたからだと彼女は言う。これは彼女が他者とコミュニケーションを行なうことに苦手意識を抱いていることと関連するようである。

私は知らない人とのコミュニケーションが苦手なんです。特に、自分の思想信条にかかわることになると、普段の私を知っている人なら驚くくらい言葉がきつくなります。相手を罵倒したり、怒鳴ったり。ここで話している感じとは全く違ってしまいます。(2016年8月12日フィールドノーツより)

ジャーナリストという仕事は、見知らぬ人と出会い、話し、情報を取ることが活動の中心であろう。自らの思想信条とは異なる人びととの接触は日常茶飯であったことと考えられる。いくら活動的であっても、いや、活動的であればあるほど、自分の苦手とする状況に自ら参与することになる。そのことが彼女自身を疲弊させていったようである。

ジャーナリストとアクティビストをしている間、間違った考え方をしている人が許せなくて、すぐ爆発するんですよ、ボンッ、って。それで、疲れてしまっ。(2016年8月12日フィールドノーツより)

疲れ切っていた彼女は、もともと旅行好きであったこともあり、長崎へ行くことにした。長崎のあるゲストハウスで休暇を楽しむ中、彼女はあることに感心する。

4年前 [2012年], 長崎に行って、ゲストハウスに泊まったとき、そこに折り鶴 [종이학] がおいてあって。平和のために折って下さい、っていうことなんですけど、オーナーたちはそれを客に強制することはないわけ。意味を理解した人はわかった上で折るし、わからない人も単に面白そうだから折るけ

ど、オーナーたちは絶対に「平和のために」なんて考え方を強制して来ないんです。(2016年8月12日フィールドノーツより)

長崎のゲストハウスで見た折り鶴とそのゲストハウス・オーナーの姿勢に彼女は深い感銘を受けたようで、実際、ボシ・ゲストハウスのキッチンにあるテーブルには折り紙の束と折り鶴の折り方の説明書きが置かれていた。「生き方や考え方が違って、共に同じ場所にいられたら、と思って、仕事を辞めてゲストハウスをやることにしてみました」(2016年8月12日フィールドノーツより)と語る彼女は、帰国後まずはソウルでゲストハウスを始めたのだそうである。

しかし、彼女は始めたばかりであったソウルのゲストハウスを閉め、釜山でゲストハウスをするようになった。残念ながら、なぜ釜山に戻ったのかは教えてもらえなかった。大学入学以降、彼女はソウルの住人として生きてきた。現在の自分は、釜山では「異邦人 [stranger]」であるという。

確かに出身地は釜山なんですけど、高校を卒業してからはずっとソウルにいたので、釜山には友人がいないんです。仕事や日常についてあれこれ話せる友人が。いま、私は釜山では異邦人 [stranger] なんです。小中高時代の友人はみな結婚していて、話があいません。ソウルにはいるんですけど。(2016年8月12日フィールドノーツより)

自称「異邦人」が外国人を迎え、時間と空間を共有する。これは故郷、「わがまち」としての地域社会に人を迎え入れるという態度とは一線を画する。なぜなら、迎える側も「異邦人」だからである。ほんの一時ではあれ、「異邦人」同士が共に過ごす。その「出会い [encounter]」に参加するメンバーは流動的である。しかし、そこにボシ・ゲストハウスがあり、ミンジさんがいることによって、彼女とゲストハウスを媒介として、より密なつながりが生じる可能性がある。

### 3.2 ダルマ・バックパッカーズ

釜山都心部の都市鉄道駅で電車を降りてしばらくいったところに、ダルマ・バックパッカーズの入っているはずの高層アパートが建っていた。玄関ホールに入り、エレベーターで15階まで上がってはみたものの、ゲストハウスらしきものがどこにもない。これはオーナーに直接連絡したほうが良さそうだ、と考え、ゲストハウスから来ていたメー

ルに書かれている電話番号に電話をしてみた。相手はすぐに出てくれて、エレベーター前で待っているよう言ってくれた。

しばらくしてオーナーのジョンさん(42歳 [2016年当時]、男性)が現れ、一緒にエレベーターに乗り込み、1階まで降りた。15階ではないのか、と不思議に思っていると、降りたエレベーターからさらに奥へと続く細い通路を通り、別のエレベーターに乗り込んで再度15階まで上がっていった。確かに、そこにダルマ・バックパッカーズがあった。キッチン、ダイニング、リビングルームを中心に、6人用ドミトリ部屋とプライベートツインルームが1つずつ、という構成である。広いリビングルームにはカーペットが敷かれ、ソファ、大型テレビ、ドラムなど民族楽器が置かれている。そこからベランダに出てみると、線路とマンション群が見渡せる。

チェックインしたのが午後1時であったこともあり、ジョンさんは若い女性とベッドメイキングをしているところであった。その女性は香港出身で、「カノジョ [여자친구]」だと紹介してくれた。「ゲストハウス文化に関心がある」と言うと、このゲストハウスに来る客のタイプ分けをしてくれた。

ヨーロッパ人はオープンマインドです。東南アジア・中華系もヨーロッパ人に似ています。彼らの傾向としては、70% [の人が] オープン、20%は周りを観察している、反応をうかがっている、で、10%は [手で×の形を作って顔をしかめる]。日本人と韓国人は彼らとちょうど正反対です。10%オープン、20%観察、残りの70%は [手で×の形を作って顔をしかめる]。韓国人はグループで来て、グループだけで閉じてしまう。面白いのはアメリカ人で、50%オープン、50%が [手で×の形を作って顔をしかめる]。(2016年8月14日フィールドノーツより)

ジョンさんに年を訊かれたので「43歳 [2016年当時]、1972年生まれで、ヨン様と同じです」と答えると、「兄さん [형] じゃないですか。私は1974年生まれです」と言う。「兄さん [형]」というのは韓国において男性が自分より少し年長の者を呼ぶ語である。彼はソウル出身であるが、「25歳のとき、兄が靴の製造会社に勤めていて、「靴なら釜山だ」というので釜山の会社に入ったのが釜山との付き合いの始まり」(2016年8月15日フィールドノーツより)だということである。

このゲストハウスを10年やっています。2007年に始

めました。そのときに付き合っていたカノジョが金持ちで、ゲストハウスやるんだったら金を出す、と言ってきて、向こうは私の才能を認めて出資し、それで儲けたし、私は金を出してもらって好きなことをする。これは win-win の関係です。もう連絡はとっていないのですが。(2016年8月15日フィールドノーツより)

しばらく釜山で会社員として働いていたジョンさんは、会社を辞めてすぐゲストハウスを始めたわけではない。ワーキングホリデーでニュージーランドへ渡航したことを皮切りに、約5年間、世界各地を渡り歩いていたようである。

29歳のときに、会社を辞めました。子どものころからずっと勉強しつづけて、会社で働いて、金を儲けて、ふと、「これでいいんだろうか」と思って。2002年、韓国でも初めてニュージーランドにワーキングホリデーに行くことができるようになって、それでニュージーランドに行きました。(2016年8月15日フィールドノーツより)

ニュージーランドから帰ってきて、すぐまたオーストラリアに行って、ウン、なるほど、と思って次はヨーロッパに行って、ドイツに行って、フランスに行って、ウン、なるほど、わかった、そして、アメリカに行って、ということをや3年間やりました。帰国して、ゲストハウスを始めました。(2016年8月15日フィールドノーツより)

とりわけ、ジョンさんの生き方や考え方に大きな影響を与えたのがレゲエの先駆者の一人であるジャマイカのミュージシャン、ボブ・マーリーの音楽と、それに付随するマリファナ文化であった。

そのとき [ニュージーランド滞在時]、向こうで会った日本人にボブ・マーリーを教えてくださいました。「日本と韓国の文化レベルは同じくらいじゃなかったの？ 段違いじゃないか？」と思いました。ボブ・マーリーは自由だし、ドラッグもやるので、韓国には一度も来たことがありません。[中略] [韓国は] 独裁体制だったし、ボブ・マーリーは韓国社会に入れたくないことばかりするから、[韓国に] 一度も来られなかったのです。(2016年8月15日フィールドノーツより)

外国で一番印象的なのはマリファナ文化です。ヨーロッパ人は食事も酒も自分の分を自分だけで食べて飲みます。だけど、マリファナはジョイント、みんなで共有するんですね。(2016年8月16日フィールドノーツより)

もちろん言うまでもないことであるが、韓国でも大麻は一部医療用を除いて非合法であり、ダルマ・ゲストハウスにおいてもそれが提供されたり推奨されたりするわけではない。ジョンさんにとってボブ・マーリーの音楽とマリファナ文化は、人びとが自由に幸福に暮らすことのできる、彼にとって理想的な文化状況の象徴なのである。ゲストハウス内の壁にボブ・マーリーやチェ・ゲバラのポスターが貼られているのも、彼なりの社会への働きかけである。

ボブ・マーリーやチェ・ゲバラのポスターはゲストハウスに若い韓国人が来たときに説明するためです。「この人はボブ・マーリーと言って……」と。少しずつ、小さなことから意識を変えていかないと文化は変えられません。少しでも「お？ これは誰だ？ [어? 이게 누구야? ]」と関心を持ってもらえたら。(2016年8月15日フィールドノーツより)

ゲストハウスの白い壁の一部には、びっしりと文字が書かれている。これは、2011年に滞在したニュージーランド人ゲストが暗記していたチェ・ゲバラの演説を書いていったことから、他のゲストにもコメントを残していったことにしたのだそうである。言語は様々であり、イラストも添えられていたりする。そこに書かれたコメントを見ながら、ジョンさんは「外国人」と韓国人との態度の違いを次のように説明する。

壁にコメントを書いてももらっても、外国人と韓国人には違いがあります。ヨーロッパ人でも東南アジア人でも、「ジョン、ありがとう [고맙워요.]」「Thanks, Jeong」と相手のことをまず考えて、相手に対して言葉を発する。韓国人は違う。「私が釜山に来た [내가 부산에 왔어.]」。自分のことばかり。ところが、「自己紹介しろ [자기소개 해.]」といっても、自己紹介できない。外国人は見事にやってのけるのに。(2016年8月16日フィールドノーツより)

ここで読み取ることができるのは、他者とのコミュニケーションをはかる際には相手を慮るべきだが、韓国社会

にはそれが足りない、というジョンさんの認識である。彼は文化について独自の見解を持っており、折に触れて文化について語ってくれた。

良い国の条件、良い国といえますか、文化の発展する国の条件は4つあると思います。まず、人々の幸福感が高いこと。そして、ヒッピーが多いこと。自由な発想やいろんな考え方ができる人がいないと。そして、リラックスできる環境、最後に、これ [と言って大麻を吸う仕草をする]。(2016年8月15日フィールドノーツより)

韓国には文化がありません。戦争で全部壊れてしまったのです。これ、見て下さいよ [と言ってベランダのガラス越し、山腹に家が建ち並ぶ様子を指差しながら]。これ、韓国戦争 [朝鮮戦争] で北朝鮮 [北朝鮮] から逃げてきた人たちが家を建てて [住んでいる]、小さくて、狭くて、[家が] 全部そっくりです。(2016年8月15日フィールドノーツより)

日本には伝統祝祭 [전통축제] がたくさんあるでしょ？ 音楽にあわせてみんなで踊る、[著者：盆踊り?] そうそう、盆踊り、あれは年齢に関係なくみんなで楽しむでしょ？ 韓国にはそういう祝祭、伝統がなくなってしまった。いや、あるんですけど、若者たちはそういうものを格好悪いもの、古いものはダメだ、って拒否する。ナンタ<sup>3)</sup>、知ってるでしょ？ あれは伝統的な文化だったんですけど、新しく見て面白くしたんですけど、結局、金儲けばかりなんです。韓国の文化とか、伝統とか、祝祭とか、全部金儲けのためのものになっています。(2016年8月15日フィールドノーツより)

金儲けとか競争とかにばかり集中していて、文化の発展なんかあるわけがありません。リラックスする間がないんですから。幼いときからずーっと勉強ばかりして、会社で働いて。(2016年8月15日フィールドノーツより)

誰もがみんな都市に集中して暮らして、毎日毎日勉強して、働いて、イライラして、ストレスをためて。だから、あんな他の国にありますか？ 焼酎たくさん飲んで [소주 많이 마시고] 路上で嘔吐 [「オエーッ」と言いながら床に倒れて見せる]。大量に酒を飲んでは大騒ぎし、喧嘩して [싸우고]、それでス

トレスを爆発させている。そんなことをするくらいなら、マリファナを解禁して、みんなリラックスした方がいい。それと、多様性。「あ、お前はそっちへ行くのね、俺はこっちに行くよ」。みんながそれぞれに幸福に暮らせたらいいのに。(2016年8月15日フィールドノーツより)

私は韓国が好きですし、韓国文化も好きです。ただ、これ [とマリファナを右手の人差し指と親指で摘んで口元に持っていく仕草] が、ね？ これがあれば最高なのに。(2016年8月15日フィールドノーツより)

これらからわかるのは、あくせくと生きることや競争を忌避し、共にあること、時間や空間、楽しみなどを共有すること、多様性を彼が重視しているということである。ジョンさんはこれらの語りにおいて、常に「個人的に考えて見ると [개인적으로 생각해 보면]」や「私の考えです [내 생각이예요]」などを発言の最初や最後に必ず言い添えていた。ゲストハウスを開業した理由が明確に語られたわけではないが、彼自身が求める生き方を実現するための拠点となっていたことは見て取れるであろう。

### 3.3 ヘッピー・ゲストハウス

ヘッピー・ゲストハウスは釜山の市街地からずいぶん離れた場所に位置する。最寄りのバス停からも20分以上は歩かなければならない。3階建ての小さなビルで、もともとライブハウスであった地下1階にレセプションがある。階段を降りて扉を開けると、そこは幾つかのテーブルと椅子の置かれた共用スペースになっており、バーカウンターが設置され、そこにオーナーのパクさん(32歳 [2016年当時]、男性)が立っていた。

チェックインを済ませ、言葉少ななパクさんはともに階段を上って2階の部屋に案内してくれた。4人用ドミトリー部屋が左右に2つずつ並んでいる。3階はツインルームにすべく改装中だと、作業着姿のパクさんは教えてくれた。工事も自ら全てやっているとのことであった。

パクさんはあまり話さない。彼自身の言葉通り「英語が話せない」こともあるが、もともと寡黙な性格のようである。インタビューをしようと地下に降りたとき、彼は飼っているセキセイインコを私の手のひらの上に乗せてきた。大人しい鳥で、私の手の中で全く身じろぎもしない。「かわいいなあ！」と私が日本語で言うと、パクさんも「かわいい、かわいい」と同じように日本語で言った(2016年

8月22日フィールドノーツより).

出身もこの町です. ですからここでゲストハウスをやっています. この周辺にはここしかゲストハウスはないですし. (2016年8月22日フィールドノーツより)

大学は名前を言ってもわからないような, 誰も知らない小さな町の大学を出ました. (2016年8月22日フィールドノーツより)

雑居ビルの1フロアや高層アパートの一室をゲストハウスとして利用している例が多いのに対して, ここは小さいながらもビル全体がゲストハウスの施設である. それは, この建物自体が彼の所有だからである. そして, それこそがパクさんがゲストハウスを開業した理由と結びついている.

始めたきっかけは, 4年前 [2012年] おばあさんの様態が悪くなって, その世話をするようになって仕事を辞めたことです. それまでエンジニアとして飛行機を作る会社に働いていました. おばあさんが亡くなって, 遺産として家を引き継ぎました. このビルですが. 「最近, みんなゲストハウスやっているし, お前もやってみたら?」と親族に言われて, 何もわからないまま2013年10月にここでゲストハウスを始めました. ゲストハウスのことも知らないし, 海外旅行もしたことがないので最初は何もわかりませんでした. やっているうちにだんだん面白くなってきて, 今も続けています. (2016年8月22日フィールドノーツより)

パクさんはもともとエンジニアであり, しかもインタビュー時点まで海外旅行をしたこともなく, ゲストハウスとは何かを知らずに開業したということになる. 試験を受けて宿泊業に関する資格も取得し, 各種申請書類を準備するなど, 開業するまでの苦労は相当なものであったと考えられるが, 本人所有の建物で, 本人がそこで暮らしていることが, 開業を比較的容易にしたようである. パクさんは, 本人の目指すゲストハウス像を持たないまま, 実際にゲストハウス経営をするなかでその「面白さ」を認識していったようである.

去年 [2015年] まではインドネシア人・マレーシア人がほとんどでしたが, 今年に入ってから多様な国

の人たちが来るようになりました. 日本人は少ないです. (2016年8月22日フィールドノーツより)

週末は人が多いですが, 普段は少ないです. 前はゲストハウスが少なく, ここにもたくさん人が来ましたが, でも最近はそんなに来ません. 金にはなりませんけど, 面白いから続けています. (2016年8月22日フィールドノーツより)

パクさんはゲストハウス経営・運営について「面白い」と何度か発言しているのであるが, 具体的に何が「面白い」のかを語ることはなかった. ただし, 彼が何を「面白い」と感じているのかを伺わせるものがある. それが, 地下にある共用スペースである.

もとライブハウスだったこともあり, その共用スペースは広々としている. テーブル, 椅子, ソファも置かれ, 飲み物の販売機もある. 彼自身も管理人室よりは共用スペースにすることが多く, そこでくつろぐ世界各国から来たゲストたちをカウンターから眺めていた. インタビュー時, パクさんはゲストの若い韓国人男性から花札のルールを教わり, それをととても気に入ったようで, 著者やゲストの若いアフリカ系フランス人女性を誘い, ゲームが始まった(田保 2021: 43). 毎日のように入れ替わるゲストと過ごし, コミュニケーションをはかることに「面白さ」を感じているように見受けられる.

### 3.4 サラ・ゲストハウス

地下鉄の駅を出て大通りを南へ歩く. 商店や飲食店, カフェが軒を連ねている. もうすぐビーチだ, というところで, 左に折れる. 狭い路地であり, ひと目で元はモーテルであったことがわかる建物がひしめき合っており, それらはすべてゲストハウスに看板を掛け変えている. その中の一つがサラ・ゲストハウスである.

扉を開けて中に入ると, 右手に, この建物が元はモーテルであったことを表す受付の小さな覗き窓が見えた. 覗き窓の扉は二重になっていて, 表側はガラスであるが, 奥側の扉には受付室の中が見られないように模様紙が貼られている. 昼間だからか明かりもついておらず, 人の気配もない. しかし, 受付室の出入口口前には運動靴が左右きっちり揃えて置かれており, 中には確かに人のいることがわかる. そこで覗き窓を右手で軽くノックしつつ, 「こんにちは [안녕하세요? ]」と声をかけると, 「はい [네~ ]」という年配の男性と思しき声がした. 受付室の扉の向こうで人がむっくり起き上がる気配がして, 覗き窓が開いた.

50歳代後半らしい、灰色の髪が顔を覗かせる。昼寝していたようである。

「20,000ウォン [約2,000円]」というので支払いをすると、「部屋はこちらです、上がって来て下さい」と受付室から出てきて1階の6人用ドミトリー部屋に通される。入って右下のベッドを指差し、「ここでいいですか?」と言うので、「はい」と答える。男性は部屋の扉横にある貼り紙をパンパン、と叩いて「ワイファイ、パスワード」と単語で話し、「ゆっくりして下さい」と出て行く。彼がお話を聞かせていただいた、ユンさん(58歳 [2016年当時])である。

ユンさんは1958年、韓国の江原道東海市に生まれた。インタビュー当時 [2017年3月22日]、58歳である。彼の父は海軍の軍人であり、彼自身も若い頃海軍にいたことがあったという。また、インタビュー当時、彼の長男も海軍にいるということで、スマートフォンに保存している彼の父、ご本人、彼の息子たちの写真を見せながら彼は説明してくれた。次男は釜山にある私立大学で電気工学を専攻しているという。ユンさん一家は彼が幼い頃、江原道から釜山へ移り、それから現在まで釜山で暮らしている(2017年3月22日フィールドノーツより)。

ユンさんは彼の妻と2人でゲストハウスを営んでいる。ご夫婦ともに、別々の機会にそれぞれ「2年前から始めた」と発言しているが、開業年は2014年である。

ユン：2年前までコンテナの図面を描く仕事をしていたのですが、仕事をしていると頭が痛くて。今もほら [スマホの写真を見せながら]、針を打って来たんです [写真には、2本の長い針が刺さっている男性の右手の甲が写っている]。今朝、痛くて右腕が上がらなくて、韓医院 [한의원] に行ったら針を打ってもらったら、ほら [右肩をグルグル回して、腕があがるようになったことを示す] (2017年3月22日フィールドノーツより)

ユン：妻は公務員をしていました。それもやっぱり仕事がしんどくて、二人して仕事をやめてしまおう、と言って、仕事をやめて、あの建物を買ったんです。

著者：買われたんですか？

ユン：はい、他のゲストハウスはたいい月払い [월세] で部屋を借りてやっています。でも、そんなに客が来るわけじゃない。たくさん [ゲストハウスが] 出来すぎて、他のゲストハウ

スと競合するから値段を下げていって、赤字赤字で、結局みんなやめて出ていってしまう。(2017年3月22日フィールドノーツより)

次男はまだ大学生であり、仕事を「引退」するわけにもいかないであろう状態で、夫婦同時に前職を辞めてゲストハウスを開業しているわけである。しかも、上の発言に見られる通り、経済的安定は見込めない。モーターであった建物を購入していることを考えると、経済的な不安は少ないのかもしれない。夫婦ともに前職での仕事がつらく、そこから退避したいということが先に立ったのであろう。

ユンさんは登山を趣味としている。旅行に出かけるとすれば目的は登山であり、海外旅行として中国や日本へ行ったときも、山に登ることが目的であったという。彼は英語を話すのが苦手であり、外国人ゲストの対応をするのもっぱら彼の妻である。彼女はとても流暢に英語を話す。ゲストの大半は中国や台湾からであるが、アメリカ、フランス、ドイツなどの欧米諸国、マレーシアやインドといった東南アジア・南アジア、珍しいところではドミニカからもゲストが来たという(2017年3月22日フィールドノーツより)。

著者：このゲストハウスはいいです。こうして社長さん [ユンさんのこと] ともお話できますし。南浦洞にあるゲストハウスは、泊まるだけでした。

ユン：ウチもそうですよ。すべてのお客さんと話をするわけじゃない。来て、寝て、次の日すぐ出ていく、というのがほとんどですよ。(2017年3月22日フィールドノーツより)

しかし、必ずしもゲストとのコミュニケーションを忌避するわけではなく、それどころか、ユンさんと近所の居酒屋でともに食事をしているとき、彼は次のように発言している。

ユン：ゲストハウスをやって、こうやって外国から人が来て、焼酎なんか酌み交わして、それで友だちになれるじゃありませんか。(2017年3月22日フィールドノーツより)

すべての人びとと付き合う必要はない。しかし、ほんの少しでも付き合うことのできる人と出会うことができれば、それで十分なのである。

## 4 考察

4名のゲストハウス・オーナーの語りを通して、ゲストハウス開業の動機・理由とオーナー自身の価値意識について、次の4つについて指摘できるだろう。すなわち、1. 経済的理由、つまり「金を儲けたい」という理由は聞かれなかったこと、2. ゲストハウス開業と開業前の職業とは直接関係がないこと、3. ゲストハウス開業前に何らかの挫折や辛さを経験していること、4. 他者と何かをシェアしたいとする傾向が見られること、である。それぞれについて検討していこう。

### 4.1 経済的理由

第一に、経済的な成功を求めてゲストハウスを開業した、という開業動機は全く聞かれなかった。この調査以前に著者が釜山でよく利用していたゲストハウスのオーナーは2014年当時、「誰もやっていなかったから」と著者に語ってくれたことがある。彼の実家はもともと小さなモーターを複数経営しており、彼もその一つを手伝っていたが、「独立」ということで一つのモーターをゲストハウスに改装したのである。2016年の本調査実施当時、すでにそのゲストハウスは廃業している。思うようには儲からなかったのである。

ボシ・ゲストハウスのミンジさんが語るように、「多くの人が来てくれて、近所の人も『あれ？ウチも金儲けできるんじゃないか？』ってなって」という雰囲気は2016年の調査実施当時も存在した。本稿で取り上げたオーナーではないが、「もともとソウルの明洞で[ゲストハウスを]やっていて、そのとき周囲には3件しかなかった。釜山に戻ってきてやり始めたときもウチくらいだったのに、あっという間にこの辺にもゲストハウスがたくさんできた。韓国人は、誰かがやると我も我もとその周辺で同じ商売を始める」（2016年8月11日フィールドノーツより）と語るオーナーもいる。そのオーナーは著者が社会調査の目的で来たことを告げると安心したように、「以前はゲストハウスについて訊かれるといろいろな話をしていたのだが、[話を聞きに来たその人が]あるとき近くにゲストハウスを開業して、びっくりして、それからあまり話さない」（2016年8月11日フィールドノーツより）と語ってくれた。ソウルや釜山といった都市部で「ゲストハウス・ブーム」とでも呼ぶ現象が起こっていたことは確かである。

しかし、図1でも見たとおり、長期で継続してゲストハウスを運営するオーナーは実際に起業したオーナーの半分である。経済的理由をもってゲストハウスを続けるのは

難しいということがわかる。

### 4.2 開業前の職業

第二に、ゲストハウス・オーナーたちのゲストハウス開業前の職業はゲストハウス開業や運営に直接的な関係はなさそうであった。ミンジさんはジャーナリストであり、ジョンさんは靴製造会社の会社員、パクさんはエンジニア、ユンさんは製図工であった。宿泊業や観光業とはもともと無縁だった人びとなのである。

本調査の対象者中に、大学時代の専攻が観光学であったオーナーが1名いる。しかし、彼のゲストハウス開業前の職業は石油会社の会社員であり（2017年3月18日フィールドノーツより）、やはりゲストハウス開業と前職は直接的な関係はない。

韓国でゲストハウスが広がりを見せるようになったのが2012年以降ということを見ると、新規参入者が大半であることは当然であろう。これは別の見方をすると、釜山のゲストハウスはほとんど「素人」によって運営されている、ということを表している。この「素人」は必ずしも否定的な意味を帯びたものではない。宿泊業とはどのようなものであり、観光業とはいかなるもので、ゲストハウスとはこのようにある「べき」などといった固定観念から自由である、ということである。様々な経歴の持ち主たちが、それぞれの思いを持って参入してきているわけであり、それだけにゲストハウスごとに特色や個性が出やすいとも考えられるのである。

### 4.3 開業前の経験と競争社会

第三に、前歴を語ってくれた4人のオーナーたちはそれぞれ、ゲストハウス開業前に何らかの挫折や辛さを経験していることである。ミンジさんは対人関係に疲弊したこと、ジョンさんは学校や職場・仕事における競争に次ぐ競争という生き方に対する疑問、パクさんはおばあさんが亡くなったこと、ユンさん夫妻は仕事をめぐる身体的・精神的不調がそれぞれゲストハウス開業のきっかけとなっている。パクさんはおばあさんの介護をすることになったのを機にエンジニアの職を辞している。つまり、ここで共通しているのは競争社会からの離脱、あるいは退避／待避、という側面である。

韓国が熾烈な競争社会であることはよく知られている。特に、1997年に発生した経済危機以降、韓国社会における人びとの競争は激化しているようである。1997年、タイの通貨バーツが暴落したことをきっかけに発生したアジア

ア通貨危機の影響を受け韓国の通貨ウォンも価値が急落し、外貨準備の枯渇から当時の金泳三政権はIMF（国際通貨基金）に緊急支援を要請した。このとき韓国の経済政策は新自由主義的な「構造改革」を迫られ、以降、職場や教育現場での競争主義と成果主義がよりいっそう激化した。グローバリゼーションの進行を競争社会の到来と捉え、国際社会で通用する人材育成に重点を置く方向で様々な改革が進められた（金 2019: 156）。

労働環境の変化が人びとの生活に与えた影響は「38線・45定・56泥」という、経済危機以降の生きづらさを表す言葉に表れている、と金香男（2019: 157）は指摘する。38線とは「早期退職の適齢期のライン（線）にのる」こと、45定は「45歳で定年退職」、56泥は「56歳までいたら給料泥棒」という意味である。韓国を代表する財閥や金融機関などでは入社後も過酷な社内競争があり、40歳代後半で役員になれなければ会社をやめる、という人も多いという。早期退職した人びとの中にはコーヒーショップやフライドチキンなどの飲食店経営に乗り出す人もいるが、大半は失敗すると言われている。

大学進学率が高く、若年層の高学歴化が進行するなかで、韓国社会は雇用創出に失敗してきた。図2に見られるように、韓国では他の世代に比べて20歳代の失業率が高く、全体平均が4%前後を推移しているのに対して、20歳代の失業率は8～10%である。この傾向は男女の間に差はない。春木育美（2020: 173）は、韓国では就職を諦めた人やアルバイトをしながら就職活動する人を含む20歳代

の「拡張失業率」は約23%に達すると言われており、これは4人から5人に1人が事実上の失業状態にあることになる、と述べている。熾烈な競争の場である職場に入る前に、すでに熾烈な競争にさらされているのである。

韓国における競争の熾烈さをよく表しているのが、人びとの「教育熱」の高さである。韓国では基本的に大学受験まで本格的な入試はなく、国公立・私立を問わず、大学入学志願者は毎年11月に行われる大学修学能力試験（通称「修能」）を受験することになっている。元来、これは人びとの間に繰り広げられる過度な受験競争を避けるためにとられた対策だったにもかかわらず、皮肉なことに、受験競争がこの一点に集中することになり、大学入試をめぐる競争はより熾烈なものとなっている。

韓国においても様々な論者によって教育熱の説明が試みられてきた。例えば、作家・社会学者であるジョン・スポク（2007）は、韓国における教育熱を「単純に良い教育を受けるための競争ではなく、社会的出世のための手段確保次元の競争意識である」（ジョン 2007: 135）と定義している。教育を熱望すると言えば、人々が自らの能力を開発・向上させ、人格を陶冶することに熱心であるかのように思われる、しかしジョン（2007）は、人々は教育そのものを求めているのではなく、その結果得られる社会階層の上昇手段を獲得することに熱を上げているのだという。

ジョン（2007）は教育熱を、儒教文化から派生した縁故主義から説明している。縁故主義とは「血筋を引いたり、同じ故郷出身であったり、同じ学校を出た者だけで

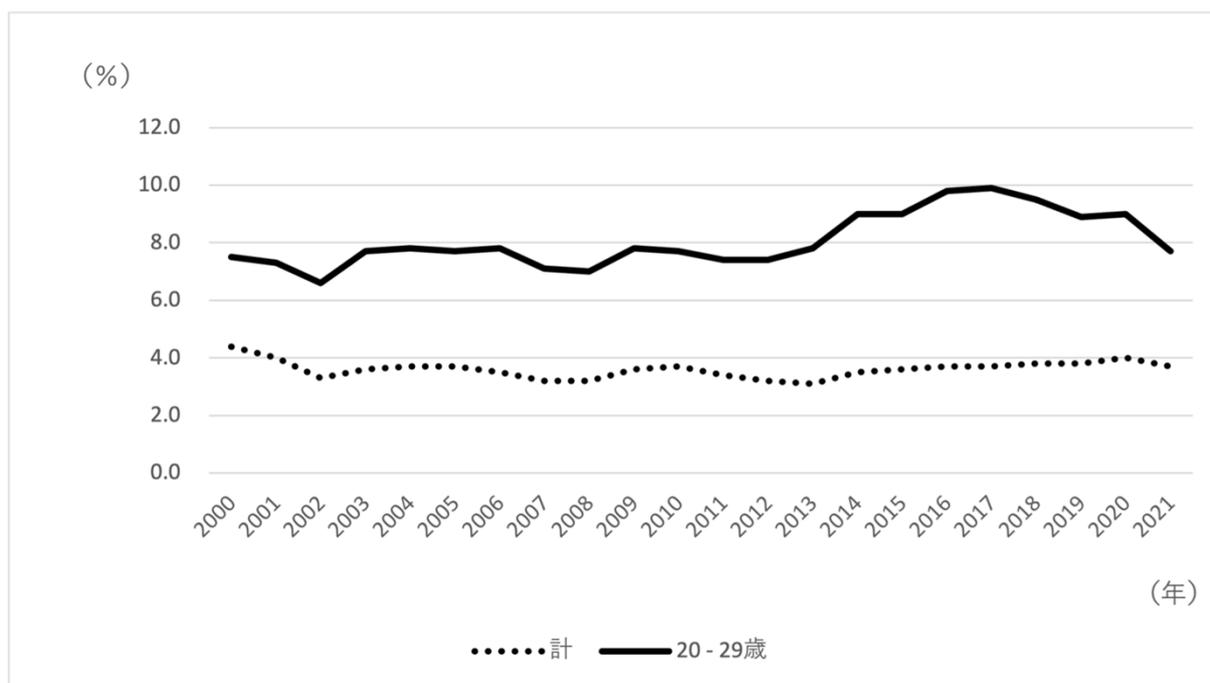


図2 韓国における失業率の年次推移（2000～2021年）

出典：出典：統計庁（韓国）「経済活動人口調査」データより著者が作成。

ひとかたまりとなり互いに心を通わせ助けあい特権を分かち合う排他的集団意識を言う」(ジョン 2007: 132)。血縁・地縁・学縁が代表的な縁故であり、韓国社会ではこれらの縁故によるつながりが個々人の社会的立場を決定する。ジョン (2007: 138) はこのような縁故主義の文化的出所は儒教であるという。李氏朝鮮時代、両班たちは党派を形成して権力闘争に明け暮れた。党派は血縁・地縁・学縁が複雑に絡まって出来上がったものである。儒教の先賢を祭り、後進の教育にあたる書院は「地縁と血縁を基礎とする学縁現象の産室」(ジョン 2007: 139) であり、出身書院ごとに党派が形成され、ある党派が権力を掌握すると他の党派は粛清された。ジョンは現在の教育熱の高さと学閥闘争は以上のような儒学者たちによる派閥闘争の延長線上に現れた現象であると考えている。つまり、儒教文化による縁故主義が高校や大学の学閥という形で温存され、富や社会的地位を左右するようになってきているというのである。

確かに、より良い教育を求めるといよりは社会移動の手段を求めているのはその通りであろう。しかし、儒教文化による縁故主義ですべてを説明してしまうのは無理がある。学歴主義は近代の産物である (Dore 1976=2008)。出身階層に関係なく、能力のある者がしかるべき社会的役割を担うという業績主義がその基本にはある。縁故主義は属性主義の最たるものであり、業績主義とは相容れない。

社会学者の金東椿 (2005: 164) は、近代以降の韓国人の教育熱が中国や日本よりはるかに激しい傾向があり、また、開化期以前に朝鮮を訪れた外国人も支配層に強い教育熱があったとは記録しておらず、儒教的伝統と現代の教育熱とを結びつけるのは難しいと述べている。金 (2005: 161-162) はさらに、教育熱を近代化の産物としてのみ片付けることもしりぞけており、それでは地位競争の土台や条件がどのようにつくられたかが検討されていない問題があるという。1945年の日本からの解放は一時人びとに教育による階層移動の希望を与えはしたが、1950年代の国家形成時期、独裁政権により人びとの政治参加や抵抗による現実脱却の可能性が完全に封鎖され、ただ国家公認の学歴追求によってのみ階層移動がなされるように誘導されたと金 (2005: 170-172) は説明している。

韓国の教育熱をより包括的に説明したのが教育社会学者のオ・ウクファン (2000) である。オ (2000: 18) は韓国社会の教育熱を「韓国人たちの教育欲求が社会的に蔓延し韓国社会全般に表れている、正常水準を超えた学歴および学閥争奪現象」と定義し、教育熱が韓国固有の現象であり、しかも否定的な意味合いでそうであることを強調している。

オ (2000: 394-395) による韓国の教育熱に関する説明

の概略を示すと、次の通りになる。王朝の没落により伝統的身分制度が崩壊し、社会階層移動が広く発生した。その際、学歴や学閥が社会階層移動の道具として利用されたが、不平等な社会構造を正当化する装置としても活用された。日本の朝鮮総督府と米軍占領当局は植民統治の正当化や占領の効率化のために教育制度を改編し、教育機会は徐々に拡大し均等化された。その後、社会の急変と経済の急激な成長の中で、学歴と学閥が実質的に社会経済的地位を獲得するための重要な変数として作用するようになり、学縁による人脈が形成された。さらなる社会構造変化を通じて、ほぼ全ての韓国人が直接的・間接的に階層移動を経験し、学歴が階層上昇移動の要であることを認識した。この経験によって人びとは「教育出世論」を少しずつ誇張しながら拡散することになり、それはひとつの鉄則として韓国社会に定着していった。その後の学校教育の量的拡大と教育の就職・所得効果の遞減という状況の変化はしかし、人びとにその鉄則を捨てさせなかった。それどころか、韓国の親たちは子どもたちが学歴や学閥において他者より優位に立つように、子どもの教育により多く投資してきた。伝統的に崇文主義「武より文を崇め尊ぶ態度や価値観」が深く根付いているため、学歴と学閥の装飾効果は減ることなく、今も韓国の人びとは熾烈な教育競争を繰り広げているのである。

オ (2000) による韓国の教育熱についての説明にしたがえば、韓国社会の競争社会としての側面は、経済成長期に形成され「鉄則」となった「教育出世論」を人びとが頑なに信じ、人びとがその信念にしたがって行動するために、子どもたちにより良い生活をしてほしいと願う親たちは引くに引けない状態になっている、ということである。教育社会学者のイ・ジョンガク (2003) は、教育熱の韓国的な特性を示す現象として私教育費の高さを挙げており、「親たちの考えの中にはいかなる犠牲を払おうと子どもを大学まで勉強させようという考えが支配的である」(イ 2003: 60) と述べている。韓国の競争社会は非合理的価値に基づく人びとの行為が織りなす相互作用によって形成・維持されているのである。

金仙花 (2012: 119-120) は、韓国社会の競争意識の激しさに注目されがちであるが、その裏には極端なまでの平等意識が存在することを指摘している。同質性の高い社会なので、人びとの行動決定は近隣との比較の上でなされ、隣が出世したのであれば自分も、という平等主義である。それが熾烈な競争のエンジンとして人びとを駆動するので、競争社会としての韓国社会が立ち現れるのである。

4人のオーナーの語りのなかにも出てきた「近所の人も『あれ？ウチも金儲けできるんじゃないか？』ってなっ

て」(ミンジさん)、「最近、みんなゲストハウスやっているし、お前もやってみたら？」(パクさん)という近隣者・近親者たちの言葉や、ユンさんの「たくさん[ゲストハウスが]出来すぎて、他のゲストハウスと競合するから値段を下げたって、赤字赤字で、結局みんなやめて出ていってしまう」という言葉がこのことを裏付けている。ゲストハウス開業に「成功」している様子を見た人びとが自らもゲストハウスを始めたものの、思うようにいかず、ゲストハウスを運営する目的や理想、あるいはゲストハウス運営そのものの「面白さ」を見出すこともできないまま、多くの人々がゲストハウスを廃業していることが考えられる。ゲストハウス運営を軌道に乗せるという点では、廃業者は競争に破れたように見える。しかし、そうではない。収入の増大や社会的地位の向上を目的とする韓国社会における競争の文脈では、それらを獲得するのが難しいという点で、そもそもゲストハウス運営を競争の手段として利用できないのである。

これは見方を変えれば、韓国社会においてゲストハウスを開業し継続的に運営するという行為は、韓国社会における人びとのライフスタイルを改変していく方向性を持っているのではないかと、とも考えられる。韓国社会における競争の文脈に則って行動し思考する限り、人びとは思うような「成功」を手に入れることが難しい。競争の文脈では看過されがちだった部分に価値を見出すことで、多様な生き方に道が開かれる。ゲストハウス開業と継続的運営という行為は、韓国社会における競争の文脈を脱し、人びとがライフスタイルを多様化させていく傾向の現れとして理解することができるのである。

#### 4.4 他者と何かをシェアしたいとする傾向

最後に、他者と何かをシェアしたいとする傾向が見られることである。ミンジさんは生き方や考え方が違っても共にいられる場所を志向し、ジョンさんはマリファナ文化から共有することの楽しさを学び、パクさんはゲストが集まれる広い共用スペースを用意し、ユンさんはゲストとの会話を楽しんでいった。

韓国語で「話をする」ことを「이야기를 나누다」という。「이야기를 (イヤギルル)」は「話を」という意味で、「나누다 (ナヌダ)」というのは「分ける、交わす」という意味である。つまり、韓国語では「話をする」ことは「話を分かち合う」ことなのである。

韓国のゲストハウスでは韓国人のゲストを見かけることが多い。これは外国人観光都市泊業登録事業者としては違法である。しかし、ゲスト側はそれを知らないことも多

く、また、すべてのゲストハウスが外国人観光都市泊業登録事業者というだけでなく、さらに、外国人ゲストのみを専門とすると経営が厳しいこともあり、若い韓国人たちが低料金で宿泊できるゲストハウスを利用するという状態が続いている<sup>4)</sup>。

ゲストハウスは外国人ゲストの宿泊する場所であるということから、「外国人と英語で話したい」という理由でゲストハウスを利用する韓国人ゲストもいる。この調査でも、アメリカで事業を始めたいという年配の男性(2016年8月10日フィールドノーツより)や、「まだ決まっていませんが、来年か再来年には海外に赴任することになります。それで、少しでも英語で話す練習をしたくて、ゲストハウスに泊まることにしました」(2016年8月21日フィールドノーツより)という若い韓国人男性に出会った。

ゲストハウスに韓国人が宿泊することの利点は、外国人と英語で話す機会が韓国人の側に生じるということだけではなく、外国人にとっても現地の人びとと接触する機会になるということである。観光で韓国を訪れる外国人にとって、食堂や商店で行われる店員たちとのちょっとした会話ややり取りは楽しい体験である。そのときに好意的な対応をしてもらえると、その国の社会に好感を抱くことにもなる。しかし、もう少し込み入った話や、人びとの考えや思いを聞きたい、この国の社会のあり方についてもう少しだけ深く知りたい、と考える外国人にとって、現地の人びとが利用するゲストハウスは絶好の機会を与えてくれるのである。

オーナーも含めて、様々な立場や背景を持った人びとが集まって、互いが互いに関心をいだし、言葉や体験、食事や時間を「分かち合う」ことのできる場所としての可能性をゲストハウスは持っている。ゲストハウスが韓国各地にできるということは、「分かち合い」の経験を韓国社会に広め、ライフスタイルを変えていく拠点が拡散するということである。先に教育熱の説明に関して触れたオ・ウクファンは韓国社会について次のように述べている。

現時点で、韓国人は韓国社会がどのような社会であり、これからどのような社会を志向すべきなのかを考えてみなければならない。韓国人は理想的な社会モデルを持っておらず、ただ他者より先立つことだけに全力を尽くしている。要するに、韓国人は出世にのみ執着しており、自身の生や社会の方向に対しては無関心なのである。国家と個人はそれぞれ経済成長と出世を唯一の目標に設定し邁進するのみである。出世した個人は他者の上に君臨することで誇示するのみであり、共に生きる生 [더불어 사는 삶] の

意味を追求しない。一例を挙げると、韓国の財閥が財産を社会に還元するに当たってとても吝嗇なのは、富を蓄積し誇示することにより大きな意味を置くだけで、分かち合い [나눔] から来る楽しさ [즐거움] を知らないからである。(オ 2000: 408)

「共に生きる生 [더불어 사는 삶]」に意味を見出すことができれば、いくら訪韓外国人のニーズが高いからといってもゲストハウス運営を継続するのは難しいであろう。そこには文化的背景の異なる人びとが絶えずやって来ては去っていく。ゲストハウスのオーナーたちはそこに楽しさや喜び、面白さを見出しているのである。ゲストハウスは「分かち合い [나눔] から来る楽しさ [즐거움]」を、オーナーも含めて経験できる場所なのである。

## 5 おわりに

釜山でゲストハウスを運営する4人のオーナーへのインタビュー調査結果から、およそ次のようなことがわかった。第一に、経済的理由、すなわち訪韓外国人の増加や宿泊施設の多様化に対する需要の増大は新規開業者を一時的に増加させはするものの、運営の継続にはつながらないということ、第二に、ゲストハウスは「素人」によって運営されるという特徴があり、オーナーの個性が反映されやすいということ、第三に、競争社会という側面の際立つ韓国社会において、ゲストハウスは人びとの出世主義的なライフスタイルを改変していく拠点となる可能性を持つということ、最後に、ゲストハウスはオーナーをも含めて人びとが「分かち合いから来る楽しさ」を経験できる場であるということ、である。

本稿では深く立ち入ることはできないが、最後に、ゲストハウスのサードプレイスとしての側面について少し触れておきたい。「サードプレイス [the third place]」は都市社会学者のレイ・オルデンバーグが「インフォーマルな公共生活の中核的環境 [the core settings of informal public life]」(Oldenburg 1999=2013: 59) を表現するために用いた術語である。

オルデンバーグ (1999=2013:49-56) はアメリカにインフォーマルな公共生活がないことで人びとの仕事と家庭生活に寄せる期待は限度を超え、余暇は消費へと歪曲され、本来の満足感は得られていないという。くつろいだ充実した日常生活を送るために、オルデンバーグ (1999=2013:57) は家庭 (第一) と職場 (第二) とともに、「第三に広く社交的な、コミュニティの基盤を提供するとともにそのコミュニティを謳歌する場」がバランスをとっ

て併存する必要があると述べる。彼の言うサードプレイスの特徴は、①中立の領域で [on neutral ground], ②平等にするもの [leveler], ③会話が主な活動, ④利用しやすさ [accessibility and accommodation], ⑤常連がいること, ⑥地味さ [a low profile], ⑦雰囲気遊び心がある, ⑧もう一つのわが家 [a home away from home], である (Oldenburg 1999=2013: 64-97)。具体的には、フランスのカフェやイギリスのパブなど、近所の人びとが気軽に立ち寄って、常連とでも見知らぬ人とでも会話を楽しむ場所である。

残念ながら、釜山のゲストハウスでは地域社会とのつながりを見出すのは困難であった。ゲストの安全性を重視する観点から、たいていのゲストハウスはセキュリティ・システムを導入しており、近所の人が気軽に立ち寄り、といった場所ではなかった。しかし、地域社会を超えて人びとが集い、互いに平等な立場で会話を楽しむことがゲストハウスの特徴であり、そこにリピーター (常連) が生まれ、「もう一つのわが家」として足繁く通うゲストが増えれば、それはすでにサードプレイスとしての機能を果たしうる場と言えるのではないだろうか。ゲストハウスとサードプレイスとの関係についての考察は今後の課題としたい。

### 注

- 1) 문화체육관광부 「『외국인관광 도시민박업』 업무처리 (등록·관리) 지침 (2019. 11 월)」, p.2 (文化体育觀光部 「外国人觀光都市民泊業」業務處理 (登録・管理) 指針 (2019. 11 月))。
- 2) ただし、外国人觀光都市民泊業所のみを「ゲストハウス」と考えるのは早計である。同様の施設として公衆衛生管理法による一般宿泊業・生活宿泊業、農漁村整備法による農漁村民泊業などを根拠に「ゲストハウス」を営業している宿泊施設もあり、人口に膾炙しているにもかかわらず、法的に・制度的には「ゲストハウス」は存在しないのである。「존재하지만 현행법에 없는 '게스트하우스' (存在するが現行法にない 'ゲストハウス')」 숙박매거진 (宿泊マガジン 2021.05.06, <http://www.sukbakmagazine.com/news/articleView.html?idxno=52881>, 2022年2月28日 23:10 参照)。おそらく、外国人觀光都市民泊業に未登録ながら「ゲストハウス」を名乗って営業している宿泊施設はもっと多いであろう。
- 3) 『ナンタ』とは、包丁やまな板などのキッチン用品を楽器・打楽器として用い、韓国の伝統的な農楽のリズムをベースにした楽曲を演奏しながら、コミカルなパフォーマンスを繰り広げる「非言語公演」のことである。ソウルと済州島にそれぞれ専用劇場があり常設公演が行われている一方で、積極的に海外公演も行われている。The NANTA ウェブサイト (<https://www.nanta.co.kr:452/jp/>) を参照 (2022年3月8日閲覧)。

4) こうした状況を打開すべく、韓国文化観光研究院は『ゲストハウス制度導入に関する研究』という報告書でゲストハウスを法的に規定し、ガイドラインを策定することを提案している(ユ 2020).

## 文献

石川美澄, 2014, 「国内におけるゲストハウス台頭の社会背景に関する考察—質問紙調査を基に—」『日本国際観光学会論文集』 21, 99-104.

小倉紀蔵編, 2012, 『現代韓国を学ぶ』有斐閣.

金仙花, 2012, 「韓国の社会」小倉紀蔵編『現代韓国を学ぶ』有斐閣, 115-150.

金香男, 2019, 「変化する韓国社会」新城道彦・浅羽祐樹・金香男・春木育美『知りたくなる韓国』有斐閣, 146-168.

新城道彦・浅羽祐樹・金香男・春木育美, 2019, 『知りたくなる韓国』有斐閣.

田保顕, 2021, 「異文化を背景とする者たちが形成する相互行為秩序—韓国・釜山のゲストハウスを事例に—」『観光振興研究』 1(1), 33-46.

春木育美, 2020, 『韓国社会の現在—超少子化, 貧困・孤立化, デジタル化』中央公論新社(中公新書 2602).

Dore, R. P., 1976, *The Diploma Disease*, University of California Press (=松居弘道訳, 2008, 『学歴社会—新しい文明病』岩波書店).

Oldenburg, R., 1999, *The Great Good Place* (2nd ed.), Hachette Books (=忠平美幸訳, 2013, 『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房).

김동춘 [金東椿], 2000, 『근대의 그늘: 한국의 근대성과 민족주의』 당대 (=水野邦彦訳, 2005, 『近代のかげ—現代韓国社会論』青木書店).

이종각 [イ・ジョンガク], 2003, 『교육열 올바르게 보기 [教育熱を正しく見る]』원미사.

오육환 [オ・ウクファン], 2000, 『한국사회의 교육열: 기원과 심화 [韓国社会の教育熱: 起源と深化]』교육과학사.

유지운 [ユ・ジユン], 2020, 『게스트하우스 제도 도입에 관한 연구 [ゲストハウス制度導入に関する研究]』한국문화관광연구원.

정수복 [ジョン・スボク], 2007, 『한국인의 문화적 문법: 당연의 세계 낯설게 보기 [韓国人の文化的文法: 当然の世界を見慣れぬ目で見る]』생각의 나무.

한홍구 [韓洪九], 2009, 『특강 한홍구의 한국 현대사 이야기: 역사의 한복판에서 길을 묻다』(=米津篤八訳, 2010, 『倒れゆく韓国—韓洪九の韓国「現代史」講座』朝日新聞出版).

(受理日 2022年3月10日)

(せとうち観光専門職短期大学・准教授)

E-mail: akira-taho@g.seto.ac.jp